

# 猫白血病

## Feline Leukemivirus Infection

猫白血病ウイルスは、1964年に初めて分離されたウイルスで、白血病やリンパ系の腫瘍、免疫不全などを筆頭に、全身性の様々な症状を示す伝染病です。このウイルスは現在世界中の猫から確認されています。猫免疫不全症候群（猫エイズ）ウイルスに似ていて、感染することにより他の単純な疾患をより複雑に、治りにくくします。つまり他のすべての病気に対する抵抗力を弱めてしまう恐ろしい病気です。ウイルス自体はさほど抵抗力の強いものではありません。英語名の頭文字をとってFeLV（エフイーエルブイ）とも呼ばれます。

### 原因

原因はレトロウイルスの中の猫白血病ウイルスの感染により起こります。

感染は猫白血病ウイルスをもつ猫のだ液など排泄物中に排出されたウイルスを喧嘩、グルーミング、交尾などにより口及び鼻などから取り込むことによる経口経鼻感染により成立します。このウイルスをもつ母猫が妊娠した場合、胎児には経胎盤感染し、仔猫には経乳感染も起こります。

ワクチン接種で予防するしかありません。猫カリシウイルスが猫の体内に侵入しても、ワクチンにより免疫ができていれば発病することはありません。あるいは、仮に発病しても軽症ですみます。猫ウイルス性鼻気管炎、猫汎白血球減少症との3種混合ワクチンを必ず接種しましょう。

### 症状

潜伏期はまちまちで長いものは1年以上も検査に反応を示すことがない場合があります。また、感染したすべての猫が発症するのではなく、無症状で過ごし、周囲に感染を広げることも多々あります（30%程度）。しかしながら、分娩、他の病気、ストレスなどで体調を崩すと体力が低下して様々な症状が発現します。

主なものとして、からだのいたるところにリンパ腫とよばれる悪性の腫瘍ができたり、白血病（血液の癌）を起こします。その他、貧血、免疫力の低下、他の病気の二次感染を増悪するなど、とにかくこの病気は全身性に多くの症状が見られる病気です。

発病すると1ヵ月以内に約50%、3年以内に80%が死亡します。

猫免疫不全ウイルスに感染していると症状はさらに重篤になります。

### 診断法

動物病院では、一般的に、問診、視診、触診などを行い、次にELISA法（酵素免疫測定法）とよばれる簡易判定検査を院内で行います。これによりほぼ猫白血病ウイ

ルスの感染が判ります。しかし、この1回の検査で陰性であっても、数ヵ月後（2～3ヵ月後）に再度検査を行う必要があります。また、確実に診断するには検査機関に依頼してIFA法（免疫蛍光抗体法）とよばれる検査も行うほうがいいでしょう。その他全身の状態を把握するために血液検査や腫瘍の確認のためのレントゲン検査、超音波検査など様々な検査が必要になります。

### 治療法

今のところ猫白血病ウイルスを殺せる薬はありません。そのため獣医師の手によって様々な治療方法が試行錯誤されてきましたが、はっきりとした効果が判定された療法はありません。

抗炎症剤や免疫抑制剤、化学療法剤の併用、症状にあわせて解熱剤、整腸剤、制吐剤、利尿剤、点滴や栄養剤の投与などの対症療法を行います。また、インターフェロンが用いられることもあります。

### 自宅での看護法

この病気は完治は不可能です。自宅では、他の猫への感染に十分注意してください。多頭飼育している家庭では病猫の隔離が必要です。通常同じ室内でも1m以上離ればこのウイルスの伝染を防げるといわれていますが、排泄物や食器、敷物などは焼却処分、あるいは消毒剤（次亜塩素酸ソーダなど）でよく消毒します。

退院あるいは通院できるようになったら、消化がよく栄養価の高い食餌を与え、ストレスを避け、投薬はきちんと行いましょう。また、暖かく十分な湿度を保った環境を整えてあげ、汚物などはこまめに処理してあげて清潔な環境を保つことが重要です。動物病院には液体やペースト状の栄養剤などもありますので、食欲がない時には主治医の先生に相談してこれらを処方してもらおうといいでしょう。

### 予防法

ワクチン接種により予防するのが最良の方法と考えます。この病気の場合はワクチン接種をする前に、必ず猫白血病ウイルスに感染していないか検査する必要があります。また、単独飼育、室内飼育で他の猫との接触を回避することも予防法となります。

### メモ

この病気は定期的に検査を行うことが重要です。検査で感染していることが判明しても必ずしも発症するとは限りません。感染＝死ではなく、発症＝死亡する確立が高いというふうに考えてください。